

すべてはみ手の内に

ルカによる福音書 24 : 1 - 49

24:01 そして、週の初めの日の明け方早く、準備しておいた香料を持って墓に行った。 24:02 見ると、石が墓のわきに転がしてあり、 24:03 中に入っても、主イエスの遺体が見当たらなかった。 24:04 そのため途方に暮れていると、輝く衣を着た二人の人がそばに現れた。 24:05 婦人たちが恐れて地に顔を伏せると、二人は言った。「なぜ、生きておられる方を死者の中に捜すのか。 24:06 あの方は、ここにはおられない。復活なさったのだ。まだガリラヤにおられたころ、お話しになったことを思い出しなさい。 24:07 人の子は必ず、罪人の手に渡され、十字架につけられ、三日目に復活することになっている、と言われたではないか。」 24:08 そこで、婦人たちはイエスの言葉を思い出した。 24:09 そして、墓から帰って、十一人とほかの人皆に一部始終を知らせた。 24:10 それは、マグダラのマリア、ヨハナ、ヤコブの母マリア、そして一緒にいた他の婦人たちであった。婦人たちはこれらのことを使徒たちに話したが、 24:11 使徒たちは、この話がたわ言のように思われたので、婦人たちを信じなかった。 24:12 しかし、ペトロは立ち上がって墓へ走り、身をかがめて中をのぞくと、亜麻布しかなかったので、この出来事に驚きながら家に帰った。 24:13 ちょうどこの日、二人の弟子が、エルサレムから六スタディオン離れたエマオという村へ向かって歩きながら、 24:14 この一切の出来事について話し合っていた。 24:15 話し合い論じ合っていると、イエス御自身が近づいて来て、一緒に歩き始められた。 24:16 しかし、二人の目は遮られていて、イエスだとは分からなかった。 24:17 イエスは、「歩きながら、やり取りしているその話は何のことですか」と言われた。二人は暗い顔をして立ち止まった。 24:18 その一人のクレオパという人が答えた。「エルサレムに滞在していながら、この数日そこで起こったことを、あなただけはご存じなかったのですか。」 24:19 イエスが、「どんなことですか」と言われると、二人は言った。「ナザレのイエスのことです。この方は、神と民全体の前で、行いにも言葉にも力のある預言者でした。 24:20 それなのに、わたしたちの祭司長たちや議員たちは、死刑にするため引き渡して、十字架につけてしまったのです。 24:21 わたしたちは、あの方こそイスラエルを解放してくださいと望みをかけていました。しかも、そのことがあってから、もう今日で三日目になります。 24:22 ところが、仲間の婦人たちがわたしたちを驚かせました。婦人たちは朝早く墓へ行きましたが、 24:23 遺体を見つけずに戻って来ました。そして、天使たちが現れ、『イエスは生きておられる』と告げたと言うのです。 24:24 仲間の者が何人か墓へ行ってみたのですが、婦人たちが言ったとおりで、あの方は見当たりませんでした。」 24:25 そこで、イエスは言われた。「ああ、物分りが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち、 24:26 メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか。」 24:27 そして、モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、御自分について書かれていることを説明された。 24:28 一行は目指す村に近づいたが、イエスはなおも先へ行こうとされる様子だった。 24:29 二人が、「一緒にお泊まりください。そろそろ夕方になりますし、もう日も傾いていますから」と言って、無理に引き止めたので、イエスは共に泊まるため家に入られた。 24:30 一緒に食事の席に着いたとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。 24:31 すると、二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。 24:32 二人は、「道で話しておられるとき、また聖書を説明して下さったとき、わたしたちの心は

燃えていたではないか」と語り合った。24:33 そして、時を移さず出発して、エルサレムに戻ってみると、十一人とその仲間が集まって、24:34 本当に主は復活して、シモンに現れたと言っていた。24:35 二人も、道で起こったことや、パンを裂いてくださったときにイエスだと分かった次第を話した。24:36 こういうことを話していると、イエス御自身が彼らの真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。24:37 彼らは恐れおののき、亡霊を見ているのだと思った。24:38 そこで、イエスは言われた。「なぜ、うろたえているのか。どうして心に疑いを起こすのか。24:39 わたしの手や足を見なさい。まさしくわたしだ。触ってよく見なさい。亡霊には肉も骨もないが、あなたがたに見えるとおりに、わたしにはそれがある。」24:40 こう言って、イエスは手と足をお見せになった。24:41 彼らが喜びのあまりまだ信じられず、不思議がっているので、イエスは、「ここに何か食べ物があるか」と言われた。24:42 そこで、焼いた魚を一切れ差し出すと、24:43 イエスはそれを取って、彼らの前で食べられた。24:44 イエスは言われた。「わたしについてモーセの律法と預言者の書と詩編に書いてある事柄は、必ずすべて実現する。これこそ、まだあなたがたと一緒にいたころ、言っておいたことである。」24:45 そしてイエスは、聖書を悟らせるために彼らの心の目を開いて、24:46 言われた。「次のように書いてある。『メシアは苦しみを受け、三日目に死者の中から復活する。24:47 また、罪の赦しを得させる悔い改めが、その名によってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる』と。エルサレムから始めて、24:48 あなたがたはこれらのことの証人となる。24:49 わたしは、父が約束されたものをあなたがたに送る。高い所からの力に覆われるまでは、都にとどまっていなさい。」

復活の知らせを聞いた弟子たちの最初の反応は、「たわごとのように思われたので、信じなかった」、つまり不信仰です。それは弟子たちに限らず、私たちすべての者がそうなのではないでしょうか。ルカによる福音書にある復活の話は三つあります。一つは女たちの話し、二つ目はエマオ途上の二人の弟子の話し、三つ目は11人の弟子たちに現れたという話です。どれも不思議な話で、あいまいなところがあり、復活の信ぴょう性を証拠立てるのには全く十分なものでしかありません。私たちにとっても「たわごとのような話」です。ただし、この三つの中の話も大変こだわっている一つの事がまず。それは、イエスの受難と復活は、あらかじめ告げられていたという事です(6節b-7節、26節、44節)。あらかじめ告げられていたということに、なぜこれほどこだわるのでしょうか。

イエス様は生前、三度受難予告をしておられます(9:21以下、43節以下、18:31以下)。なぜこのような予告をなさったのでしょうか。弟子たちに心の準備をさせるためでしょうか。しかし聖書には、その時弟子たちには理解できなかったと書かれています

(9 : 45, 18 : 34)。事前予告が、信仰を保つには役に立たなかったことは、ペトロが、イエスの裁判が行われた中庭で三度イエスを知らないと言ったことから分かります。何の心構えにもなっていません。

ではなぜ、予告があったことにこだわるのでしょうか。予告が備えをさせるためでないとするれば、何のためでしょうか。たとえば映画予告の場合、興味のない映画であれば見に行こうとする備えはしないでしょう。けれども、予告があったということで、その上映が一定のスケジュールのもとで計画実行されたものであることは知ることができます。突然誰かの気まぐれや偶然の成り行きで上映されたのではないということです。予告が持つもう一つの働き。それは計画されたものであるということを伝える、ということです。受難予告も同じです。それは、弟子たちに備えをさせるということにはなりませんでしたが、神ご自身のご意思とご計画の内であったことだと伝えることにはなりました。旧約・新約を貫いて一貫しているのは、すべての事は神様の取り仕切りの内にあるという考えです。十字架というおぞましい出来事でさえ、偶然の嵐に翻弄されて来たようではあっても、実はちゃんとお見通しであった、神のみ手の内であったということです。

そうは言ってもそのことが直ちに弟子たちに感動をもって受け入れられたわけではありませんでした。女たちも、天使の告げる事前予告を思い出したのはものの(8節)、この段階で神の取り仕切りを信じる信仰に至ったとは書かれていません。白けた雰囲気は漂っています。けれどもこの三つの物語が経過していく中で、人々は徐々に信仰へと導かれていく様子が描かれています。エマオに向かう二人の弟子は、イエスの話を聞き心が燃え、パンを裂く姿を見て目を開かれ、それが復活したイエスだとわかります。そして11人の弟子たちは、突然どこからともなく現れた復活のイエスが肉体を持った方であることを知らされ、心の目を開かれて、すべてが神のご計画の内であったこと、しかも旧約の昔から計画されていたことを納得する、ここに来て初めて弟子たちの信仰が完全なものになる、という筋書きです。

私たちの過去の不幸を思い出してみましょう。その不幸な記憶から私たちを救い出すものは何でしょうか。今味わっている苦しみ、将来の不安。そこから救い出すもの、それはすべてが神のみ手の内にあるということではないでしょうか。

これら一連の復活物語は、弟子たちの信仰の「再生物語」だとも言えるでしょう。しかも、ここで非常に大切なことは、この信仰に至る過程すらも一切を取り仕切っておられるのは神様だという事なのです。神様のなされたことは一方的で、弟子たちは完全に受け身でした。徹頭徹尾、神様の一人舞台です。私たちの信仰の友であった今は亡き中村善多さんが、「なぜか歳とともに復活を素直に信じられるようになったよ。」と言っておられたのを思い出します。わたしも及ばずながらそんな心境になってきました。信仰を持つということは完全に神様の業であって、わたしたちの為し得べからざることのようにです。

救いの業も、それを信じるようになるも、すべては神のみ手の内にある。これが復活の肝です。それなのに私たちは自分の力で何でもできると思い込んでいます。これが罪です。人間の知力は万能で、それで証拠立てられないものは、みんな「たわごと」だと決め付けてしまう。自分で何でもできる、その思い込みは、ひいては人を殺すところまで突き進みます。正当な(?)理由があれば人殺しも可となるのです。人間は人を殺すことができる動物です。他人も、自分も、殺すことができる。しかもおぞましくむごたらしい仕方で殺すこともある。この人間の自己過信の最大の悲劇は、自分のやった結果に責任が取れないということです。

最近も死刑囚に刑が執行されたというニュースがありました。死刑という制度は相対的なもので国によって考え方が違います。死刑を絶対的に正しいとする基準はどこにもありません。死刑囚の生い立ちや心理状態の分析を徹底的にやって、絶対に正しい判決を出すなどということはできません。永山則夫事件というのがありましたが、彼が殺人へと追いやられていった過程を知れば知るほど、社会の責任というものを感じざるを得ない、そういう事件でした。絶対の悪だと決めつけることは誰にもできません。このようにどんな判

決もあくまで暫定的なものでしかないのです。その暫定的なもので魂のある人間を殺してよいのでしょうか。刑が執行されてしまえば、ビデオテープのように巻き戻しはできません。人を殺すということはそういうものです。殺しては見た、けれどもその結果にはだれも責任が取れません。取り返しの付かないことをしてしまうということです。

限界のある知性であるにもかかわらず、何でもできると思いつむ。その行き着く先がイエスの十字架でした。救い主を人間は殺してしまいました。人間の側からすれば取り返しの付かないことです。こうしたことを人類はやってきた。累々たる屍の上にあるのが今の世界です。出口のない地獄です。人間が自分の知力で語ることのできるのはここまでです。

けれども神はその先のことを語られました。「私は計画通りにイエスをよみがえらせた」と。人間が取り戻せないことを神は取り戻してくださった。しかも完全なご計画の中で。何の恐れもないことが分かります。そしてこのとても信じられないことを信じられるようにしてくださるのも神様です。